
青い薔薇

A I K U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い薔薇

【Nコード】

N6765H

【作者名】

AIKU

【あらすじ】

いつもと同じ毎日が突然終わりをづけ、いきなり異世界に飛ばされてしまった少年少女のファンタジーストーリーが今始まる……

ふぁいる0 登場人物

～登場人物～

～主人公～

眞木 龍人 （マキ リュウト）

あまりにも単純&純粹すぎる男の子。あまり考えずに行動する事がある。

友達思いでやさしくクラスのムードメーカーでつねに笑っている。しかし、心をゆるした人にしか懐かない。

「人に優しく」と「約束をできるだけ守ろう」がもつとう。

紫苑とは小さい頃からの幼馴染。

運動神経が良く成績は残念だが頭は悪くはない。

成績は下の中。勉強をすれば上の下位にはなるはず(?)。

～親友～

風間 紫苑 （カザマ シオン）

冷静沈着な男の子。先の事を考えて行動している事が多い。

いつも龍人に「ひどい」とか「鬼畜」とかと言われる（龍人限定）
龍人曰く毒舌。クールだと思われがちだが意外と優しくよく他人（主に龍人）の世話をやく。

かなりイケメンだがクールなのであまり女の子にはもてていない。
ただし、ひそかにファンクラブがあるとの噂。

成績は上の上。学年首席。

運動神経も龍人までとはいえないが良い方。

（主な友達&クラスメイト）

潮崎 響夜 （シオザキ キョウヤ）

一言で言うと優しそうな男の子。

龍人と紫苑とは中学からの友達。若干口が悪い。

かなり腹黒いが龍人&朱奈はあまりきずいていない。

顔は爽やか（？）なのでクラスのイメージキャラクター。

友達関係がすごく幅広いため色々な事を知っている。

成績は上の下。なので頭は悪くはないが良くもない。

運動神経は龍人よりは悪く紫苑よりは良い。

久城 華鳳 (クシロ カオウ)

龍人&紫苑と同じクラスの男勝りな女の子。

紫苑とはちがったクールさん。

あまり人と喋らない為怖いと思われがち。

親しい友達の一部からは「カウ」と呼ばれている。

成績は龍人と同じで下の上。なのでいつも競っている。

運動神経は女の子のなかで一番。

伊里 朱奈 (イザト シュナ)

響夜&颯太の幼馴染の女の子。

男の子が苦手な女の子とも一定の子（主に華鳳や夢叶）としか喋らないもの静かな女の子。

龍人&紫苑達は別で響夜か颯太をとうしてのみ話す。

夢叶や華鳳、響夜、颯太にはすごく懐いている。そして、どこかずれている。

成績は常に平均点なので中の中。一度だけ平均点では無かったことがある。

運動神経はいたって普通。

五十嵐 颯太 (イガラシ ソウタ)

突っ込み役の男の子。主に龍人や朱奈に突っ込んでいる。
響夜&朱奈とは幼馴染。

頭で考えるより先に、口に出ることが多い為よくトラブルに巻き込まれる。(その場合響夜が助ける)

たまに華鳳のパシリにされている。柚姫が苦手。

成績は上の中。響夜&朱奈の中では一番賢い。

運動神経は紫苑と同じ位。

椎名 柚姫 (シイナ ユズキ)

勉強がダメダメな女の子。楽しいことが好き。

しかし、人の隠している事にきづき易いので(特に龍人&朱奈&颯太)は隠し事が出来ない。

龍人&朱奈&(特に)颯太をからかうのが今のお楽しみ。
しかし、華鳳の言う事だけは聞く。

成績は下の下。学年最下位の事もしばしば。

運動神経は華鳳の次位に良い。

宇佐美 焰 (ウサミ ホムラ)

学校で一番の不良の為誰も寄りつかずいつも一人でいる男の子。
なので一匹狼。背が高く、かなりのイケメン。
信用した人や仲間にはすごく優しい。
ただし、すごい天然さんのため柚姫にたまにいじられる・・・。

成績は上の上。しかし紫苑の方が上。
運動神経は学年トップ。

霧島 夢叶 (キリシマ ユウカ)

みんなのお母さんの存在な女の子。
ただし怒ったらすごく怖い。
しかし、よくこける為救急セットを持ち歩いている。
朱奈にやたらと懐かれている。

成績は上の下。なので響夜と同じ位。
運動神経は、全然ダメ。

（謎の人物）

永久 （トワ）

龍人達を異世界に呼んだ双子の片割れ。
眼は右が赤色で左が銀色。髪は銀髪で短髪。
見た目は小学生くらい。

刹那 （セツナ）

龍人達を異世界に呼んだ双子の片割れ。
眼は右が銀色で左が赤色。髪は銀髪で長髪。
見た目は小学生くらい。

ふぁいる1 始まりは突然に

「ここは・・・どこだ？」

く始まりは突然にく

キくンコくンカくンコくン

1回目の予鈴がなると同時に教室に入って来た一人の少年がいた。

「おい！紫苑なんで置いて行くんだよ」

学校についたとたん眞木 龍人（マキ リュウト）は前の席の間 紫苑（カザマ シオン）に向かって言った。

「お前が寝坊するから悪い」

紫苑の言っている事はたしかに正しい。が、チョット位待つなり起こすなりしてくれればいいと龍人は思った。

「紫苑のケチ」

「なにかいったか？」

「なんにも無いデス」

あまりにも今の紫苑の目つきが怖かったため言い返せなくなってしまった。

「よっ！おはよう龍人」

いつの間にか近くに来ていた五十嵐 颯太 （イガラシ ソウタ）
が話しかけてきた。

「わぁ！いつのまに・・・」

「え？いつの間になって・・・」

「龍人、颯太はさっきからいたぞ」

「え？うそー！！」

まじかよ……。全然きづかなかった……。

「うそをついてどうする」

「うわぁー俺かるく傷ついた（泣）」

颯太がシクシクと泣き真似を始めた。

「ごっごめんって颯太」

「ん？別に良いよ！」

と、ケロツと笑って答える颯太。

やっぱお前はいい奴だ……。

「話してる所悪いけどちよつといい？」

横を向くとそこにはクラスの女の子、久城 華鳳（クシロ カオウ）がいた。

「おっ！久城おはよう」

「ん・・・」

と、そっけなく返されてしまった。

「で、久城はどうしたんだ？」

あっ！そういえば・・・紫苑するどい。

「実は・・・」

「あれ？朱奈じゃん！おはよう」

颯太ー！お前は空気がよめないのかー！！

と、龍人が一人心中の中で突っ込みながら華鳳の後ろを見てみるとたしかに伊里 朱奈（イザト シユナ）がいた。

「あっ・・・颯太！おはよう！眞木くん！風間くんもおはよう・・・」

と、颯太には元気良く、龍人と紫苑には消えそうな声であいさつをして来た。

「ああ、おはよう」

「おう、おはよう」

それだけを言うとなぜか、すぐに華鳳の後ろに隠れてしまった。

「それで、結局どうしたんだ？」

「ん？・・・ああ、実は朱奈の消しゴムがあんたらの下に転がったから取らしてもらおうと思って」

おいおい、ちよつとの間、聞いてませんでしたよね。明らかに横向いてたし・・・。

「えーつと・・・これか！」

「うん、多分それ」

「はい、伊里。これで合ってるよな？」

「（びっく！）う・・・うん、ありがとう」

えっ？・・・俺なんか・・・した？

「・・・。じゃ・・・」

「ごめんね・・・。ありがとう・・・。」

と、言って帰って行った二人。

「なんか俺、伊里に怖がられるようなことした・・・？」

真剣になやんでいると急に・・・

「お前が怖いんじゃないかってあいつは男がこわいんだよ」

「うおう！！なんだ・・・響夜か」

横にはいつの間にか潮崎 響夜（シオザキ キョウヤ）がいた。

「お前らなんか俺に恨みでもあるのか？みんないつの間にか俺の近くにいて・・・」

それとも今日は厄日か??

「ん? なんの話だ? (黒笑)」

「うわぁー!! 響夜お前いつの間にいたんだよ?」

「なんだ颯太おまえもきずいて無かったのか・・・。」
紫苑はあきれた顔で聞いて来た。

「えっ! 紫苑はきずいてたのか?」

「当り前だろう、真っ先にしゃべりかけられたからな」と、紫苑は何事も無かったかのように言った。

「悪いな、驚かしたようで・・・ (黒笑)」
ん? 今何か響夜の後ろに黒い物が見えた様な・・・?

「響夜・・・お前・・・紫苑にだけ話掛けたって事は絶対確信犯だろう・・・」

「ん? 颯太何か言ったか? こっちで話そうな (黒笑)」

「ぎゃああああー」

と、なんとも黒いオーラを出した響夜に連れていかれてしまった哀れな颯太を見ていた紫苑は

「ほどほどにしておけよ」

と一応言っておいた。

「なんで男が怖いんだ?」

と、颯太の事はお構いなしに龍人は先程の考えていた。（おい！ひどいな by 颯太）

「んゝなんでだと思う？」

「おう！！なんでみんな突然現れるんだ？」

とまたもや急に出てきた椎名 柚姫（シイナ ユズキ）に聞いた。

「多分だけどあんたの反応が面白いからじゃなくいい？」
と、へらへら笑いながら言われてしまった。

「椎名、お前は何の用だ？」

あ！今この人俺の話きったよ……。ぐれてやる……。ぐすん・
・。

「あのねゝ今日あの宇佐美 焰（ウサミ ホムラ）が学校に来るんだって」

「へえーあの宇佐美が」

「えっ！宇佐美が来るの！！」

宇佐美 焰（ウサミ ホムラ）とはこの学校一の不良で、噂では百人相手の喧嘩に無傷で勝利したとか、しないとか……。

「お前ぐれてたんじゃ無かったのか？」
紫苑が聞いて来た。

「ふーんだ。誰もつつ込んでくれないから自分で復活したもんねーだ」
気付いていたのなら何か言ってくれ。

「（無視）で、それをなんで俺にいいに来たんだ？」

（無視するなあぁー！！！！ by 龍人）

「あんたなら確実な情報でももってないかなあゝって思っ

「悪いが俺は今初めてそれを知ったからなんともいえな

「んゝそっか。わかった。ありがとねゝ」

と、行って去って行った。

「でだ、いいかげん鬱とうしいぞ龍人」

「いいもんね・俺鬱陶しいもんね・」

俺・・何か悲しくないか・・・。

「あーそうだな」

「うそです。うそです。もう言いませんからゝ」

「よろしい。」

なんか俺、良いようにあつかわれてないか・・・？

「ただいまー」

「死ぬかと思った・」

と、言いながら颯太と響夜が帰って来た。

颯太は心なしぐったりしているのに響夜はすっきりした顔つきだった。

「あ！そういえばどこに行ってたんだ？」
と、俺が疑問に思った事を口にする。

「頼むからきかないでくれ……。」
と、軽く涙目の颯太がおれに縋りついて来た。
ちよつと颯太が可哀想に見えてきた……。

「そういえば龍人。お前、伊里の事を聞きたかったんじゃないのか？」

「そうだった！」

さすが、紫苑！忘れてた……。

「ん？朱奈がどうかしたか？」

と訝しげに颯太が聞いて来た。

さっきまで泣きかけていたのに朱奈の事を聞くと顔つきが変わった。

「さっき響夜が『あいつは男が怖い』って言ってたから……どう
いう意味なのかなあって思ってた……。」

「ああ、そのことか」

「んー……。それは俺らが話せる事じゃ無いから……。ごめんな
。」

と、響夜が少し困った顔で言った。

「ううん、こっちこそ変なこと聞いてごめんな」

「俺も余計な事をきいて悪かった」

「いやいや別に……。『うわあああー』……。ってなんだ颯太い

きなり」

急に喚きだした颯太を見たら・・・。

「ごめん本当にごめん・・・。俺こういうシリアスモード無理」と、笑顔で言われてしまった。

「（プチッ）颯太お前・・・。もう一回話をしにいかうか（黒笑）」

「ぎやあああつああー」

颯太、俺でも響夜みたいになると思うよ・・・いまのは・・・。

「あのく4人ともちよつといい？」

と、話しかけて来たのはクラスの委員長の霧島 夢叶 （キシマ ユウカ）だった。

「ああ、あそこの馬鹿（颯太）は置いといていいぞ」
颯太を指さしながら言った。

「馬鹿とは何だ馬鹿とは（半泣き）」

「颯太一回黙ろうな（黒笑）」

「はいいいい」

恐るべし響夜・・・。

「あはは・・・に・・・賑やかね・・・。先生にプリントを配るように言われたから・・・はい、これ」

響夜の黒笑をもらって見ってしまった夢叶だった。

「ああ、ありがとう」

4人を代表して紫苑が言った。

「いいえ、どういたしまして」

と、言って夢叶はクラスの他の奴らの所へ言った。

「何々……。ゲッ!! 数学のプリントだ……」

「うわぁ〜って事は次の時間自習か……」

「なんだ龍人嫌なのか？」

「嫌じゃないけどさ……。この量はいじめだろう……。
なんと数学の表裏合わせてプリントが6枚もあったのだ。」

「頑張れ!!」

「黙れ颯太! お前頭が良いっからって……。くう……。」

「そうだぞ颯太。俺の分までやらせるぞ（黒笑）」
と、なんともいえない会話をしていたのが今となったら嘘のようだった……。

自習の時間。

ザワザワザワザワザ……。シーン……。

数学のプリントを早々諦めて居眠りしていた龍人はいきなり静まり返った教室にびっくりした。

「紫苑何があったの？」

と、紫苑に小声で聞くと、紫苑は

「学校一の不良のお出ましだ」

と、言いながら扉の方を向いていた。そして扉の方を見てみるとあの学校一の不良、宇佐美 焰（ウサミ ホムラ）が入って来ている瞬間だった。

「椎名が言っていた噂は本当だったということか・・・」
と、紫苑が呟いていると。

「宇佐美おっはよー!!」

と、誰も喋らない中話しかけたのは颯太だった。

「あいつ・・・すごいな・・・」

「・・・あいつは頭で考えるよりも先に口に出ている時が多いからな・・・」

さすがは紫苑、こんな時でも数学のプリントをしながら冷静に突っ込んでくれた。

それで焰の方と言うと・・・。

「・・・」

「お・は・よ・う」

と、颯太に詰め寄られていた。

「・・・おはよ・・・」

と、返すと

「やったあぁーついに返してくれた！」
と、響夜に報告したら。

数学が苦手な響夜は

「マジで黙ろうな（黒笑）」

と、言って颯太を黙らしたあと

「宇佐美おはよう」

と、言ってた。

それにも、焰は

「おはよ・・・」

と、返していた。

「あーずるい！響夜には一回で返したー」

颯太・・・なんか突っ込む所が違うような気がするぞ。

「・・・・。」

「何がずるいだ馬鹿。本気で黙れ（黒笑）」

「はいいいいっ」

「・・・・。」

どうしたらいいのか迷っている焰の姿があった。

それを俺と紫苑は焰がキレないかドキドキしながら（ドキドキしてたのはお前だけだ馬鹿　by紫苑）みていた。・・・というか紫苑はもくもくとプリントをしていた。

その時だった、空からすごい量の光がふりそそいできたのは・・・。

ピカアアアアアア――――――――――

ふぁいる2 狭間の世界

ピカアアアアーーーーー
と、学校に光が降り注いで来たのだ。

く狭間の世界・・・く

「「うわああああああ」

ドサツ・・・・・・いきなり地面(?)に激突してしまった。

「っ・・・・いつてえ・・・」

「龍人、大丈夫か」
と、紫苑が聞いて来た。

「なんとか大丈夫だけどさ・・・ここは何処なんだ？」

「さあな・・・」

二人のいる場所は光に包まれているかのように温かく不思議な所だった。

「ここは狭間だヨ」

「そうここは狭間なの」

いつの間にか俺達の近くに小学生くらいの子が二人立っていた。

「狭間・・・？」

「「うん」」

「なぜ、君達はここにいるんだ？　と言うか君達はだれなんだ？」

「あっ！　そういえば・・・」

紫苑お前はこういう時でも冷静なんだな・・・。俺なんて、てんば
つてるのに・・・。

「僕は永久（トワ）」

と、右目の赤い短髪の子が言った。

「私は刹那（セツナ）」

と、左目が赤い長髪の子が言った。

「永久に刹那か・・・。よろしくな。俺は紫苑でこっちは龍人だ」

「永久に刹那よろしくな！」

「「うんよろしくね」」

「で、なんで二人はここにいるんだ」

「僕たちが二人を呼んだからだヨ」
えっ・・・？　どういう・・・？

「そ．．．颯太に響夜？それに．．宇佐美と霧島．．か？」

「ああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！龍人ー！ー！ー！ー！ー！」

「紫苑もいるな・・・」

「えーっとここはどこ？・・・わあ！！朱奈、大丈夫！！」

夢叶の近くに気絶している朱奈の姿があった。

落ちて来た時に気絶してしまったようだ。

「わあー！ 朱奈大丈夫か？」

「うつ・あれ・颯太・ここどこ？」

「確かに朱奈の言う通りだな……。紫苑ここは何処だ？」

「むっ……。なんで俺じゃなく紫苑に聞くんのだ。」

「俺の方が確かだからだろうな。なんか文句あるか？」

「い・い・え。ナンデモナイデス・・。」

む・
・
・
無言の圧力が・
・
・
○

「……で、ここはどこなんだ……」

と、痺れを切らしたのか初めて焰が喋った。

「「うわぁー！宇佐美が喋った！！」」

颯太と俺が言った途端かるく睨まれた。

「・・・・。」

ドゴッ

「颯太に龍人一回だまろうな（黒笑）」

「ひい！！・・・出た響夜の黒笑み・・・・。」
そ・・・颯太・・・響夜に睨まれてるぞ・・・・。」

「悪いな宇佐美この馬鹿どもは黙らしておく」

「・・・・いや・・・・。」

「あのゝ結局ここはどこなの？」

夢叶の後ろにいる朱奈もうなずいている。

「「ここは狭間だよ」」

永久と刹那は言った。

「狭間・・・・？というか貴方たちは誰？」

「僕は永久」「私は刹那」

「「よろしくね」」

先程と同じ様な挨拶をした。

「私は夢叶で後ろにいる子は朱奈、よろしくね」

「「うん」」

「俺は颯太」

「俺は響夜だ」

「・・・焰」

「えーーーー宇佐美名前だけかよ」

「・・・だめか・・・？」

「ここはなんか一発芸を・・・『颯太お前は黙ろうな（黒笑）』・
すいません・・・」

「・・・。」

「宇佐美、本当にしようとしなくていいぞ」
ひそかに一発芸を真剣に考えていた焰を紫苑はさり気無く止めていた。

「で、狭間ってなになの？」
さすがは夢叶、話をもとに戻してくれた。

「うーんとね、狭間は世界と世界の間だよ」

「世界と世界の間・・・？」

「うん、世界と世界の間なの」

「なんで俺たちがそんな所にいるんだ？」
と響夜が言うと。

「それは僕たち「私達」が呼んだから」

「あっ！それは俺達もきいてない！」

「そういえばそうだな」

珍しく紫苑も同じ意見だった。

「「先に行った子達にも言ったけどみんなにはして貰いたい事があるの」」

「して貰いたい事？」

「うん、今とはちがう世界に行って貰うんだヨ」

「なんでちがう世界……。というかそんな事が可能なのか？」

「あっ！！確かに紫苑の言うとうりだよそんな事ができるの？」
俺は紫苑の言っている事は確かだと思った。

「私達ならできるのー」
と、緊張感のない声で刹那は言った。

「で、出来たとして違う世界で君達は俺達に何さしたいんだ？（黒笑）」

響夜サンかるゝく、きれてませんか？（by 颯太）

「あっちに行ったらわかるヨ」

「そう、あっちに行ったらね」

二人は怪しげな笑みで言った。

「えっ・・・？どういう意味・・・？」

「そのままの意味なの」

「そのままの意味？」

「どういう・・・事・・・？」

「「いってらっしゃい」」

「えっ・・・」

まだ聞きたい事はいっぱいあるのに・・・。

ピカアアアアアアーーーーー

と、また光が俺たちを包み込んだ。

ふぁいる3 異世界にご招待

ピカアアアアアーーーーー

く異世界にご招待く

「「ぎゃあああああああーーーーー」」

「はー（溜息）またか・・・。」

「紫苑お前落ち着きすぎだろ・・・。」

「響夜、そういうお前もな」

「・・・・。（どういう仕組みなんだ？）
と、地味に考えていた焰であった。」

ドサッ。

「つ・・・・てえ・・・」

「おい、大丈夫か龍人？」
真横に落ちてきた紫苑に尋ねられた。

「うん・・・大丈夫だけど・・・なんでお前はそんなに余裕そうな表情なんだ？」

「さすがに2回目ともなるとなれるだろ・・・。」

「あー・・・ソウデスカ」

「朱奈ー（泣）」

「おい朱奈大丈夫か？」

「どうやら、朱奈はまた落ちてきたときに気絶してしまったようだ。」

「でだ・・・ここは何処だ？」

「この感じからして森の中みたいだな」

真っ暗とまではいかないがかなり暗く木々が生い茂っている所に俺達は落ちたようだ。

それにしても、なんで響夜と紫苑はそんなに落ち着いられるんだ？

「う・・・っ・・・」

「あっ！朱奈、大丈夫？」

「ん・・・夢叶・・・あれ私また気絶しちゃったの？」

「うん、体に異常はない？」

「うん！大丈夫だよww」

「そう・・・よかった」

「ごめんね心配かけちゃ・・・『あーっ朱奈』・・・颯太!」

「もう大丈夫なのか？」

「うん、2人心配かけてごめんね・・・」

「こら。」

こつん、と軽く頭を叩いて響夜は拗ねたような顔つきで朱奈にむかって言った。

「心配したのは2人だけじゃないぞ」

「あ・・・ごめんなさい」

「わかったらいい」

響夜は笑いながらやさしく朱奈の頭をなでた。

「うわぁ〜響夜たらしだ〜」

「何か言ったか颯太? (黒笑)」

「ひいひいひいー」

耳を真っ赤にしながら言う響夜は何気に可愛かった。

「それにしてもここは何処なんだろうな・・・あれ?」
紫苑は冷静に言いながら一つの事に気がついた。

「紫苑どうしたんだ？」

龍人は紫苑の異変に気づいた。

「宇佐美がない・・・」

「あーーーーホントだ!!」

「そういえばそうだな・・・一緒に落ちて来ていたよな？」

「ああ・・・そのはずだが・・・」

「あっ・・・あの・・・」

「えっ？どうした伊里？」

なぜか夢叶の後ろから朱奈が言いにくそうに言って来た。なので龍人が朱奈にむかって聞いたら又驚かれてしまった。

「宇佐美君ならあの洞窟の中に入って行っただけど・・・」

「洞窟？」

洞窟とは龍人たちが落ちて来た所から約50m位の距離にあった。

龍人達は焰が入って行ったという洞窟前まで来て中を見ると中は真っ暗だった。

「なんで宇佐美はこの中に入って行っただ？」

「私と朱奈が宇佐美くんを見つけた時にはもう声の届かない距離だったみたいで・・・ごめんなさい・・・止められなくて・・・」

「ごめんなさい・・・」

と、夢叶と朱奈は言った。

「霧島と伊里の所為じゃないよ」

2人が大分気にしていたので龍人は2人の所為では無いという意味を込めて言っておいた。

「そうだ、2人の所為じゃない・・・それにしてもなんで宇佐美はこの中に入って行ったんだ？」

「確かにそう考えると変だな？」

「意外と宇佐美ってなにも考えずに行動してたり？」

「龍人やお前じゃ無い限りそれは無いだろ」

「たしかに、あいつはちゃんと考えてから行動するタイプだな」

「なんで龍人と俺は考えてから行動しないってことになってんのさ
！！」

「そうだ颯太の言うとうりだ！！」

「「なにか文句でもあるか？」（黒笑）」
と言われてしまった。

ちなみに、紫苑は龍人をものすごくこわい顔つきで睨み、響夜は恐ろしい黒笑で颯太を黙らした。

「それにしても宇佐美くんを追いかけて中に入った方がいいのかな

「？」

「そうだな霧島の言う通り中に入ってみるか・・・」

「おう、そうだな！あっ・・・でも、光が無いのにどうやって中に入るんだ？」

あっ・・・そういえば。颯太、やっぱりお前は何気に頭がいいよ。

「ペンライトなら2本あるけど・・・」

「朱奈なんでそんなの持ってるの？」

なぜ、夢叶がそんな事を聞いたかと言うとそのペンライトの模様があまりにも朱奈が持つてると不自然な柄だったからだ。

その柄というのは真っ黒で髑髏のチェーンが付いていてどちらかと言うと焰が持っていそうな柄のペンライトだった。

「本当だ朱奈何でそんなもってんだよ？」

「そこに・・・落ちてて誰のか分からなかったからとにかく拾っておいたの」

「なら多分宇佐美のだな」

「なんでそんなの分かるのんだ紫苑」

「そうだそうだ、なあ龍人」

颯太と龍人は顔を見合わせながら紫苑にきいた。

「なんでって、ここには俺達しかいない。それに人の通った後も無い。なら考えられるのは宇佐美が落としたという事だろう」

「「あゝなるほど」」

「それよりも入るか入らないかどっちだ？」
響夜が聞いて来た。

「そりゃ勿論入るにきまってんだろう!!」

「そうだな」

「あたりまえだろ響夜」

「そうか・・・霧島と朱奈はどうする？外で待つか？」

「そんな訳ないじゃない!! ついて行く」

「うん・・・私も付いて行く」

「そうか・・・入るのか・・・」

「なんだゝ響夜こわいのかゝ」
と、ふざけて颯太が響夜を茶化した。

「そんな訳あるか馬鹿（黒笑）」
とあっさり颯太は黙らされた。

「じゃあ2人づつくらい入れるから俺と紫苑が最初に入ってその次に霧島と伊里、最後が響夜と颯太な!!」

「で、ペンライトは最初と後ろが待つという事だな」

「そのとおりさすが紫苑」

「おだてても何もでないぞ」

「ちえ・・・」

「まあとにかく入ろうぜ」

颯太がかかるくぐれている俺を見ながら言った。

「そうだな・・・ほら龍人早くしないと置いて行くぞ」

「わぁー！！！！待てよ！！！！」

そうやって俺達は洞窟の中に入って行ったんだ。

そのあとに、何があるかもわからずに・・・。

ふぁいる4 洞窟のその中に!?

「うわぁ〜真っ暗だ〜」

「洞窟のその中に!?!」

「颯太の言う通り真っ暗だな」

「宇佐美がペンライト落としていつてくれて助かった〜」
と先頭の紫苑と龍人が話していた。

「きゃぁ!!!」

「わぁ!! 霧島? どうしたの?」

「いったー……ごめんなさい……転んじやった」

「夢叶、大丈夫?」

「ええ、なんとかね」

「苔で滑ったんだな……霧島、足から血が出てる……」
洞窟の中は苔や水で滑りやすかった。

「わぁ! 紫苑の言うとおり血が出てる!!」
夢叶の足から少しだけだが血が出ていた。

「え〜っとここら辺に……あつた!」

「絆創膏？」

夢叶がポケットに入れているポーチから出したのは絆創膏だった。

「私よくこけるからいつも持ち歩いてるの」

「へーそうなんだ。何か意外だな」

と、こんな話をしながら歩いて行くと紫苑がいきなり立ち止まった。

「分かれ道だ・・・」

紫苑の言うとおりで道が二手に分かれていた。

「宇佐美はどっちに行ったんだろうな？」

「たしかに響夜の言うとおりで」

「えー・・・どうしよう」

「二手に分かれるか・・・」

と、いきなり紫苑が提案してきた。

「えっ！！でも、もし迷ったらどうするのさ」

「颯太の言うとおりでぞ紫苑！」

「ならほかにどんな手がある？」

「「うつ・・・」」

龍人と颯太は一瞬にして黙らされてしまった。

「って事でいいか？」

「ああ」

「うん、私達はいいけど・・・という風に分かれるの？って朱奈が言ってるんだけど・・・」

夢叶の後ろから朱奈が顔を覗かせていた。

「霧島と伊里は俺達4人が2人づつ分かれるからどっちについて行くか決めてくれ」

「えっ！霧島と朱奈は一緒じゃないのか？」
と、なぜか颯太が驚いた。

「颯太、もし何かあったら女子が2人一緒だと助けられないかもしれないだろ」

「あっ・・・そうか」

「じゃあさっさと決めようぜ」

「ああ、そうだな」

「」「グーとーパッ」「」

じゃんけんの結果パーは颯太と龍人、グーは響夜と紫苑となった。

「なんていうか、片方はすごく心配なメンバーだな・・・」

「心配とはなんだしんぱいとは!!」

「いや、そのままの意味だが（黒笑）」

「いや・・・ゴメンナサイソノ通りデス」

そ・・・颯太片言になってるし。

「まあ・・・心配だが2人とも運動神経はいいから大丈夫だろ・・・」

「私達もどっちについて行くか決めたけど・・・」

「ああ悪い、どうなった？」

「私が眞木くんと五十嵐くんについて行って朱奈が風間くんと潮崎くんについて行くことになったわ」

「そうか、打倒だな・・・」

「風間くんってたまにひどいよね（泣）」

夢叶が嘘泣きの真似をすると紫苑はあせりだした。

「あ・・・悪い・・・そういうつもりじゃ無かったんだが・・・」

「あゝ紫苑が女の子泣かしてる」

「颯太お前は黙れ」

さすが紫苑、眼だけで颯太を黙らせた。

「ふふっ、冗談よ。私だってこの中で一番運動神経が無い事くらいわかってるわ」

「あ・・・悪い」

「風間くんって意外と素直なのね」

「意外か？」

「ふふっ、気にしないで」

夢叶は一通り紫苑で遊んだあと龍人たちの所に行った。

「紫苑って意外とからかわれ易いんだな」

と、颯太が言ったをまたもや目で黙らさせて紫苑は思った。

（霧島って意外と黒い？）

「紫苑そろそろ行こうぜ」

と龍人と言ってきたので紫苑は考えるのを止めた。

「じゃあ俺と颯太と霧島は右に行くな！！」

「ああ気をつけろよ」

「そっちな」

「もし宇佐美がいないと判断したらすぐに引き戻して初めに落ちて来た所で待ち合わせだ」

「了解」

「じゃあな！」

ついに冒険が始まった・・・。

ふぁいる5 洞窟のその先に!?

「レッゴー」

「洞窟のその先に!？」

龍人 side

「それにしても暗いなあ」

龍人たちは右側の道を今のところ何事もなく進んでいた。

「なんだか心配だわ・・・」

夢叶が小声で心配そうに言った。

「ん？霧島、何が心配なんだ？」

「だって、いかにも何かありそうじゃない・・・」

確にお化けとかが出てきそうな雰囲気だ。

「大丈夫だって俺や颯太だっているし、なんたって霧島がいるからな！」

「そうそう」

「えっ！私なんて役に立たないわよ・・・」

「そんな事無いって！霧島はいてくれるだけで安心するから！な、颯太」

「そうそう、だって霧島がいてくれなくて龍人と2人だけだったらだいぶ心配だって」

「五十嵐くんに眞木くん・・・ありがとう」

「お礼なんて言われる様な事してないぜ」

「そうそう！・・・それにしても「五十嵐くん」って呼ばれるのってなんか他人行儀っぽいから颯太でいいぜww」

「あっ！なら俺も龍人でいいよ！！」

「うん、わかったわ！じゃあ私の事も夢叶って呼んでね」

「おう！」

「了解」

と、楽しげに進んで行っている龍人達だった。

「それにしてもなんで宇佐美はこんな所に入って行ったんだろ？」

「そうだよな・・・何か今の俺達って不思議の国のア○スみたいだよな・・・」

「確かに俺と颯太と夢叶がア○スで宇佐美がウサギ・・・って！駄

洒落かよ!!」

「確かに宇佐美くんの名前ってウサギみたいよね・・・」

「うわぁー宇佐美がウサギか・・・ちよつとイメージできない・・・」

「・・・・・・・・」

ちよつと考えてしまった龍人と夢叶だった。

「それはちよつとな・・・」

「そ・・・そうね・・・」

「でもさ・・・『ドオオオオオオオオン』!!・・・何の音だよ!!」

「この先からだよな颯太、夢叶急ごう!!」

「お・・・おう」

「うん!」

3人が進んでいくとそこには大きな広場みたいになっている所があった。

その真ん中らへんに大きな箱がありその近くに《何か》がいた。その《何か》はゆっくりとだが確実に龍人たちに近づいてきた。

「うわ!なんだあれ・・・」

『あれはね、魔物だヨ』
いきなり声が聞こえた。

「えっ・・・誰？」

『誰ってひどいヨ！永久だヨ』

「へっ・・・永久？・・・何で永久の声が聞こえるんだ？近くに
いるのか？」

『いないヨ！！狭間から君の頭の中に電波みたいに送ってるんだヨ
！』

「そんな事ができるのか・・・？」

『うん、やっと龍人に繋がったけどネ。まったく・・・何でこんな
にも繋がりにくいんだヨ・・・』
と永久に愚痴を言われてしまった。

「それにしてもなんで魔物？」

『その世界のはたまにいるんだヨ。で、魔物の倒し方は知ってる？』

「知ってる訳ないだろこっちの世界にはいなかったのに」

『だよネ・・・どうしよウ・・・』

と、永久と龍人が話していた。

「龍人・・・何でこんな時に一人でブツブツ言ってるんだよ！！」

と颯太に怒られてしまった。

「えっ！独り言じゃなくて永久と話してるんだけど……」

「はぁ？永久なんて何処にもいないぜ？」

『多分颯太にはまだ聞こえてないんだネ』

「そうなんだ……」

『まあとにかくそこらへんに隠れる所はない？』

「隠れる所……あった!!」

壁と壁の間に人が1人づつ入れそうな所があった。

『じゃあとにかくその中に入って隠れテ』

「わかった!……颯太、夢叶こっちだ」

颯太と夢叶を壁の方に読んだ。

「この中に隠れるのね!」

さすがは夢叶、龍人が言う前にわかってくれた。

「なんだかよくわからないけど俺も従う」

と、颯太は言った。

そうして三人は中に入った。

「てかさあこの中に入って大丈夫なのか？」

「あっ!……確かに……」

『それなら大丈夫だヨ』

「うわぁ!!」

いきなり声が聞こえたらしく颯太と夢叶が二人して驚いた。

そりゃそうだ・・・俺だって驚いたモン・・・。

『うわぁ・・・って僕はお化けかヨ・・・』

「その喋り方は永久？」

『その通りだヨ・・・龍人とは違って一発でわかってくれたから許してあげるヨ』

あっ・・・やっぱり根に持ってたんだ・・・。

「それよりなんで大丈夫なの？」

『それはネ、あの魔物は光に寄ってくるからペンライトの光が見えないその中なら近寄ってこないんだヨ』

「そ・・・そうなんだ・・・」

「朱奈と響夜と紫苑・・・大丈夫かなぁ・・・」
と、颯太らしくない声で呟いた。

「そうね・・・大丈夫かしら・・・」
夢叶まで心配だったらしく不安そうに言った。

「大丈夫だって!! だってあっちには紫苑がいるんだぜ、あの紫苑が!!」

「・・・そうだな、それに響夜も朱奈もいるもんな!!」

「そうね絶対大丈夫よね」

二人ともいつも通りに戻ってきた。

『話してるところ悪いんだけど、魔物がいなくなったみたいだヨ』

「って事はもう出てもいいのか？」

『うん、いいヨ』

「じゃあ出ようか!!」

「「うん!」」

そして龍人達は穴から出た。

そこには永久の言ったとおり魔物はいなかった。

「それにしてもさあこの箱の中に何があるんだ？」

『颯太、よく気が付いてくれたネ!それは僕たちからのプレゼントだヨ!!』

「プレゼント？」

『まあ百聞は一見にしかず、って事で中を見てみなヨ』
永久がそう言ったので龍人達の中を見てみた。

「なんだこれ！」

「剣と弓と・・・本？」

中には何と夢叶が言ったとおり剣と弓となぜか白い本があった。

『剣は龍人、弓は颯太、その本みたいなのは夢叶のだヨ』

「私はなんで・・・本？」

『理由は単純。一番、素質があるからだヨ』

「素質って何の素質が私にあるって言うの？」

『まあ・・・それは持っていたらわかるヨ・・・それより龍人と颯太、使い方は何となくわかるよネ』
なんとなく話を逸らされたような気がする・・・。

「うん、何となくなら分かるけど・・・」

『ならいいヨ。まあ今は必要ないけど必要になったらちゃんと使ってネ』

「必要になるなんて事あるのか？」

『そのうちネ・・・アッ！！そっちはダメだヨ！！』

「えっ？何がだめなんだ？」

『・・・そっちは・・・龍・・・その先に・・・プツン』

「永久どうした？ 永久？ 永久？」

「何があったのかしら？」

「この先に何かあるんだよな・・・龍人、夢叶早く行こう！！もしかしたら宇佐美に何かあったのかも」

「そうだな夢叶俺達のうしろにいろよ」

「えっ・・・うんわかったわ」

「じゃあ早く行こう！」

ふぁいる6 洞窟のその先に!？ part2

「それにしても暗いな・・・」

＼洞窟のその先に!？ part2＼

紫苑side

「颯太や龍人がいなかったらすごい静かだな・・・」

響夜はちよつと居心地が悪かった。

三人は歩いていった。しかし、龍人達のようにしゃべる訳でもなくただただ歩いていた。

必要なこと以外喋らない紫苑はもとより、いつもは普通に喋る朱奈も紫苑がいるからなのか喋らなかった。

「そうだな・・・いつもは騒がしいが、いなくなるとなんだか静かすぎるな・・・」

紫苑も響夜と同じ思いだった。

「それにしても、何で宇佐美はこの中に入って行ったんだ?」
と、響夜は言った。

「確かに・・・理由がわからない・・・」

「・・・から・・・」

「ん？・・・朱奈なんて言った？」

「永久と刹那がそうするように言ったからだって」

「なんで伊里はそんな事が分かるんだ？」

「聞こえるから・・・」

紫苑が話しかけるとすぐに響夜の後ろに隠れてしまった。

「伊里・・・そんなに俺が怖いかな？」

「・・・風間君は優しい人・・・」

「そうか・・・？」

「うん・・・だって文句を言いながら眞木君のお世話をやいてる時だってすごく目が優しいもの」

「・・・」

「風間君は怖くないよ。ただ、慣れていないだけ・・・多分風間君にはすぐになれると思うな」

「そうか、あと『風間君』は、やめてくれ・・・何か歯がゆいから・・・」

紫苑は顔を真っ赤にしてそっぽを向いていた。

「うわぁ・・・珍しい・・・紫苑が照れてる・・・」
と、純粹な感想を言って来た響夜を睨んでおいた。

「くすくすww面白いのねww私も朱奈でいいよ紫苑君」

「ああ、わかった」

「よかったな!・・・で、いきなり話をかえて悪いんだが何で永久と刹那が宇佐美に言っただって事が分かるんだ?」

いきなり話を変えすぎだろう・・・と、紫苑は思った。

「えっ?なんでって刹那が教えてくれたからだよ」

「刹那に会ったのか?」

「ううん、狭間で会ってからにはあって無いよ」

「なら何で・・・『ドオオオオオオン』・・・何の音だ!!」
いきなり奥からすごい音が聞こえて来た。

「行ってみるか?」

「ああ、宇佐美がいるかも知れないからな」
と二人が進むか迷っている・・・

『焰なら大丈夫だよww』

「「誰だ!!」」

『うわぁゝ二人ともはもったねゝ』

「刹那・・・」

聞こえて来た声は刹那の声だった。

『うん、正解だよ』

「宇佐美は無事なんだな」

『紫苑は心配症なのね、焰は今のところ大丈夫だけどできれば急いで奥に進んでね』

「どういう事だ？」

『行ったら分かるよ。あっ！！ちょっと待って！！』
と、刹那が言った途端箱が目の前に降りて来た。

「なんだこれは？」

『響夜、よくぞ聞いてくれました！！中を見てみなよww』
三人が中を見てみると中には刀と二対の銃と青い本が入っていた。

「・・・なんで本？」

『んゝそれは朱奈のだよ、響夜は銃で紫苑は刀ねゝ』

「刹那、なんで私のは本なの？」

『それは後からのお楽しみww』

「なんで俺達にこんな物を渡すんだ？」

「「ゾクツツツ」」

響夜と朱奈は寒気がした。

『そんな怖い顔しないで〜紫苑。あなたが一番わかってると思うけど?』

「ここはそんなにも危険なところなのか?」

『簡単にいえば・・・ね』

響夜と朱奈には何の話なのか分からなかった。

「どういう事だ?」

「いや・・・悪い・・・」

響夜はそれ以上聞かなかった。・・・いや聞けなかった。

紫苑は無表情だった。しかし、何も受け付けないというオーラを紫苑は出していた。

「ねえ、刹那」

『なに? 朱奈?』

「なんで私達はこの世界に呼ばれたの?」

朱奈は朱奈なりに話を変えようとしたらしい。

『・・・ごめんなさい。それはまだ言っちゃダメなの・・・』

「そうなんだ・・・いつかは絶対言ってねww」

『うん、約束する!・・・待ってそっちはダメ』

「どうした？」

三人は刹那の異様な雰囲気驚いた。

『紫苑・・・その先は・・・』

「刹那！！どうした、刹那！！」

いきなり刹那からの声が聞こえなくなった。

「響夜、朱奈、先に何かあるみたいだが進むか？」

「ああ」

「もちろん」

「じゃあ急ぐぞ」

ふぁいる6 洞窟のその先に!？ part2 (後書き)

なんだかこの話が一番ぐだぐだになってるような気がする……。響夜と紫苑のしゃべり方が一緒だから難しいです……。こんな作者でごめんなさい。

ふぁいる7 やっと発見!!

「ああああっーーーー!!!!」

く やっと発見!!

龍人達は走って先に進んでいた。するとだんだんライトに光が要らなくなっていた。

「この先だな」

その先にあったのは湖だった。

「龍人・・・それに颯太と霧島か？」

「あっ!! 紫苑」

声のした方を見てみると紫苑達がいた。

やはり紫苑達も永久達にプレゼント(?)を貰ったみたいだった。

「結局どちらの道もここに続いていたんだな・・・」
と、響夜はしみじみと言った。

「それより、宇佐美は何処だ？」

「それしか方法はなさそうだな・・・」

「とにかく逃げればいいんだよな！」

龍人は紫苑と焰に確認した。

「・・・ああ・・・」

そうしているうちにドラゴンがまたもや向かって来た。

「逃げろ！！」

龍人達は全員散らばった。が、夢叶だけはワンテンポ遅かった。

「夢叶！！」

ドラゴンは夢叶の方に向かっていった。

龍人は夢叶を助けようと夢叶の方に向かった。

（間に合わない・・・）

ザクッ！！

《ギャアアアアアアアーーーーー》

夢叶がいたところを見ると焰が夢叶を片手で米俵を担ぐみたい
に担がれていた。

そして、もう片方の手にはしっかりと大きな剣が持たれていた。
その大剣でドラゴンの目を軽くかすめたらしい。

「・・・大丈夫か・・・？」

「え・・・ええ・・・」

いつの間にか呻いているドラゴンから離れてこっちまで来ていた。

「夢叶に宇佐美!!二人とも大丈夫か？」

「・・・ああ・・・」

「ええ、宇佐美くんが助けてくれたから・・・」

「そうか、よかった!!」
と龍人達が話していると、

「なあ宇佐美、何でお前は一人で洞窟の中に入ったんだ？」
といきなり響夜が焰に聞いた。

「・・・永久と刹那に言われたからだ・・・」

「なんて言われたんだ？」

「・・・中にいる子を助けて・・・と言われた・・・」

「中にいる子？俺たち以外誰もいないけど・・・」

「・・・これは中に入ってから分かったんだが・・・どうやらあのドラゴンの事みたいだな・・・」

「「はぁーーーー!!」」

「・・・俺に言われても困るんだが・・・」

「いや・・・悪い・・・」

「でも、どうやって助けるの？」

いまだに焰に担がれたままの夢叶が聞いて来た。

「・・・わからない・・・」

「「「・・・」」」

と、そんな事を話していたら

「龍人、逃げろ!!」

と、逆側にいた紫苑の怒鳴り声でドラゴンが近づいて来ている事に気がついた

「チッ・・・とにかく今は逃げるぞ・・・」

「了解・・・」

「わかった・・・」

すると急に

『『こらーーーーー』』

と、頭の中に怒鳴り声が聞こえて来た。

「うわぁ!!」

「……永久……刹那……」

『まったく何でいきなり聞こえなくなるんだヨ』

『まったくね!』

「永久、刹那急に声が聞こえなくなったが何があったんだ?」

『それはこっちのセリフだヨ!! 響夜』

「えっ?」

『いきなりみんなの声が聞こえなくなっちゃったの』

「そうだったのか……」

『それよりあの子を助けてあげてヨ!!』

「……やっぱり……ドラゴンだったんだな」

焰の予想は見事に的中していた。

『そうだヨ!!』

「……何であんな風になっているんだ?」

『さすが焰だね! あの子はねちよつと質の悪い魔法の影響であんな風に暴走しちゃってるの』

「そうだったんだ……」

『だから僕たちは君達にあの子を助けてって言ってるんだヨ』
なんとなくだが龍人達は永久達の願いがわかってきた。

「・・・・・・・・どうすればいい？」

『『それは自分たちで考えて』』

「・・・・・・・・えっ！！教えてくれないの？」

『うーん・・・だって僕達にもわからないんだモンWW』

「モンって・・・・・・・・」

「どうしよう・・・・・・・・」

「・・・・・・・・一回風間達と合流するぞ・・・・・・・・」

「ああ、そうしよう」

『紫苑と朱奈と颯太には君達に言った事は伝えといたわよ』

「ありがとう刹那」

「じゃあドラゴンが止まっているうちに行くぞ」

「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

響夜の合図によって紫苑達のいる所に行った。

「宇佐美ーーーーー」

と、言って颯太が焰に飛びついた。

焰はと言うと軽く顔をゆがめていた。

ちなみに焰が顔を歪めていたのは颯太が嫌だったのではなく単にどうしたらいいか迷っていただけだった。

「颯太・・・（多分違うけど）宇佐美が困ってるからやめような（黒笑）」

「ハイ・・・ワカリマシタ」

相変わらずな二人だった。

「刹那と永久から大体は聞いたがどうする？」

紫苑が言った。

「・・・・・・・・これから俺の言う事を聞いてくれるか・・・・・・・・？」

ふぁいる7 やっと発見!! (後書き)

ごめんなさい。

中途半端なところで終わってしまいました。
本当にすいません・・・。

ふぁいる8 とにかく危機を乗り越えよう!!

「えっ……マジで……」

くとにかく危機を乗り越えようく

「宇佐美、何か作戦があるのか？」

龍人は聞いた。

「……作戦では無い……が、何とかなるかもしれない……」

「どういう事だ？」

「話を折って悪いんだけど、ドラゴンがこっちに向かってきそうよ」
夢叶の言う通りドラゴンがこっちを向いて鼻息を荒くしていた。

「チッ……一回邪魔されないとこで言いたいんだが……」
と言いつつ夢叶をまた抱え上げた。

「ちょ……宇佐美くん？」

「……なんだ？」

「なんで抱き上げるの？」

「……なんでって……危ないからだが……」

「霧島そのまま宇佐美に担がれといてくれ」

「うっ・・・風間くんまで・・・わかったわ・・・ごめんね宇佐美くん・・・」

「・・・・・・・・いや・・・・・・・・」

「おい、来たぞ」

ドラゴンが来た瞬間龍人達はバラバラに逃げ出した。

龍人と颯太、焰（ちなみに夢叶も一緒）は一緒の方向に逃げていた。

「あーーーーー!!」

いきなり颯太が声をあげた。

「なんだよ!! いきなり大声あげて!!」

「龍人あれ見て!!」

颯太が指をさした方を見ると白い小さな生き物がみいみい鳴いていた。

「なんだあれ・・・・・・・・」

「かわいい」

「確かに可愛いけど・・・・・・・・なんかあれ・・・・・・・・あの白いドラゴンに似ているような・・・・・・・・」

「なあ龍人!! 俺さわりに行ってもいい?」

「なっ・・・ちょっと!! 颯太」

「えっ!! 颯太くん?」

颯太はドラゴンに追いかけているのにもかかわらず白い生き物の方に走って行ってしまった。

「よしよしww」

「おい!! 颯太今はそんな事している場合じゃ・・・」

「・・・おい・・・逃げるぞ!!」

焰は二人をせかした。

「って、おい!! なんでそれまで連れて来てるんだよ!!」

「え・・・だってカワイインダモン」

颯太・・・お前がそんな口調で言っても可愛くとも何ともないぞ・・・。

「ほら、元の場所に戻して来なさい!!」

今なんか俺・・・オカンになれそう・・・（泣）

「龍人ひどいぞ!・・・一人で鳴いていて可哀そうじゃん・・・」

「颯太・・・」

『ドオオオオオoooooooooooo』

「「うわああー」」」

「・・・なんだあれは・・・？」

音のした方を見てみると天井に大きな穴があいていた。
そして先ほどまでいたドラゴンがいなくなっていた。

「あれ・・・あのドラゴンは何処に行っただろう？」

「・・・多分、あの穴から出て行ったんだ・・・」

すると逆側にいた紫苑達が走ってきた。

「龍人！！大丈夫か？」

「紫苑！そっちは？」

「こっちには全然来なかったから大丈夫だ・・・颯太・・・それはなんだ？」

響夜は颯太が抱き上げている小さな白い生き物に目をやった。

「うーん・・・わかんない！！」

颯太は元気良く答えた。

「なんで、そんな良く分からない物を拾うんだ（黒笑）」
颯太の頭をぐりぐりしながら響夜は聞いた。

「ぎゃああああー」痛い痛い・・・help me

「――！！」

ああ・・・デジャブ・・・。

「・・・響夜それ位にしといてやれ」

と、一先ず紫苑が鶴の一声で響夜を落ち着かせた。

「それにしても・・・かわいいわねこの子」

「かわいいね」

朱奈と夢叶が小さい白い生き物をさわっていた。

「ピギ？ピギヤピギヤ！！」

朱奈と夢叶にさわって貰っている事に大分満足しているようだ。

それにしても何故こんな所にこんな小さな生き物を一匹で母親（父親？）は置いて行ったんだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6765h/>

青い薔薇

2010年10月12日04時48分発行